ピアノ・デュオおすすめレパートリー30＋α

文＝岳本恭治（ピアニスト、音楽ジャーナリスト）、河原 亨（音楽評論・邦人作品）

ピアノ・デュオの演奏が盛んになるにつれて、楽譜も以前と比べてかなり入手しやすくなってきています。ここでは、ピアノ・デュオのレパートリーとして良く弾かれるものを中心に、おすすめレパートリー30曲（邦人作品を含む）と、おすすめ曲集をご紹介。それぞれに演奏のポイントもコメントしてありますので、参考にしてください（なお、海外版は輸入楽譜・CD取扱店にお問い合わせを）。

【データの見方】①オリジナルまたはアレンジ（編曲者）　②演奏時間の目安　③難易度（5段階）　④出版元（複数ある場合は代表的な出版社）　⑤参考ディスク（演奏者とレーベル名。アレンジ作品の場合、原曲を挙げていることもあります）

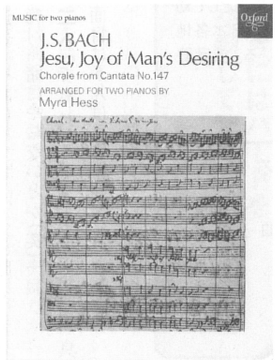
バロック時代

J＝P・ラモー（1683～1764）
ガヴォットと変奏曲

①アレンジ（J.Doebbe編）　②7分　③3　④International　⑤ビノック（原曲・アルヒーフ）

ラモーはフランスの後期バロックの作曲家で、クラヴサンの機能を最大限に生かし、優れた曲を書きました。この曲のオリジナルは《新クラヴサン曲集》の第7曲で、5つ（原曲は6つ）の変奏曲の主題となるガヴォットは優雅で哀愁を帯びた極めて美しい旋律です。バロックの正統な様式とは一味違う編曲になっていますが、雰囲気に流されることなく、全曲を通してトリルの回数や装飾音の入れ方を十分に検討して演奏に臨むとすばらしい効果が期待できます。

J・S・バッハ（1685～1750）
主よ、人の望みの喜びよ



①アレンジ（M.Hess編）　②3分30秒　③2　④Oxford

お馴染みのこの作品は教会カンタータ第147番《心と口と行いと生活をもって》の最終楽章です。2台用の楽譜は連弾用と同じものになっています。両方を弾き比べて見ると2台で演奏するほうが、音量のバランスが取りやすいように思われます。バス音でしっかり支えていくことが大切ですが、ムラにならないように、メロディとの関連を考えて演奏するとよいでしょう。

C・Ph・E・バッハ（1714～1788）
4つの小二重奏曲 Wq.115

①オリジナル　②1：2分40秒　2：3分20秒　3：2分　4：1分30秒　③2～3　④Breitkopf

J・S・バッハの次男であり、クラヴィコードとチェンバロの名手らしく、極めて巧妙な鍵盤技法で書かれています。第1曲変ロ長調は明快なメロディにより2台のピアノが対話をします。第2曲ヘ長調はゆっくりとした足取りで進行します。第3曲イ短調は「エマヌエル節」ともいえるドラマティックな曲です。第4曲変ホ長調は3度・6度を十分に揃える必要があります。

古典派

M・クレメンティ（1752～1832）
ソナタ 変ロ長調 Oeuvre1-6

①オリジナル　②全曲9分　③3　④Peters　⑤スパーダ&コッツリーノ（ARTS）

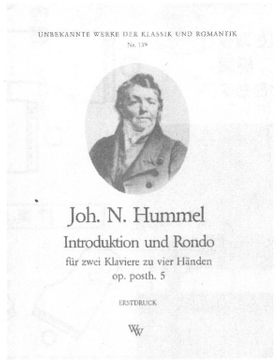
モーツァルトと並び、本格的ピアニストのルーツであるクレメンティのピアニスティックな魅力あるソナタ。Peters版には変ロ長調のソナタが2曲ありますが、Sonate Ⅱとなっている曲です。古典的な美しさに初期ロマン派の香りを感じさせる佳曲です。Ⅰ・Ⅱともユニゾンとオクターブが重くならないように演奏するのがこの曲の魅力をアップさせる秘訣です。

W・A・モーツァルト（1756～1791）
ソナタ ニ長調 K.448（375a）

①オリジナル　②全曲24分　③4　④Bärenreiter　⑤ベライア&ルプー（ソニー）

2台のピアノのためのソナタの傑作中の傑作です。モーツァルトと優れた女流ピアニストのJ・アウエルンハンマーとが演奏するための作品であったので、ⅠとⅡがまったく同等に扱われていて、エコー効果のある掛け合いや、協奏的要素満載の充実した作品です。モーツァルトの鍵盤楽器のための全作品にいえることですが、古典様式の把握と指先のコントロールが重要であることはいうまでもありません。

J・N・フンメル（1778～1837）
序奏とロンド 作品posth.5



①オリジナル　②9分　③4　④Walter Wollenweber

フンメルはモーツァルトの内弟子として学び、古典派からロマン派初期にかけて活躍した大ピアニストです。ウィーン奏法の大家ですが、後年イギリス奏法も取り入れ、2つの奏法を統合しショパンへ橋渡しをしました。この曲も魅力的な旋律が満載でピアニストのテクニックを思う存分発揮できる優れた曲です。音階や分散オクターブはもちろんのこと、かなり細かいパッセージをⅠとⅡとで合わせるという、醍醐味を味わえるスリリングな作品です。

ロマン派

C・M・v・ウェーバー（1786～1826）
舞踏への勧誘 作品65

①アレンジ（F.Corder編）　②9分　③4　④Bosworth　⑤ブリュンホフ（原曲・EMI）

原曲はソロ用ですが、後にリストやベルリオーズによってオーケストレーションされただけあって、2台ピアノにふさわしい華麗な旋律がいっぱい詰まっています。序奏と後奏での紳士と淑女の対話はソロ版よりも効果的な響きになります。ロンドの部分はフンメルが得意とした、いくつかのワルツを繋げる形式をウェーバーが踏襲したものです。2台で弾く音階が分厚くならないようにくれぐれも気をつけて下さい。2台8手の版（Robert Lienau）もあります。

R・シューマン（1810～1856）
アンダンテと変奏 作品46

①オリジナル　②13分　③4　④Peters

2台のピアノ、2つのチェロ、ホルンのための室内楽曲から改作されました。いかにもシューマネスクなロマンティックなアンダンテの主題と8つの変奏、そして主題の再現で構成されています。特に第7変奏の3度を含むパッセージにおいて、ⅠとⅡの交互の受け渡しが、あたかも1台のピアノで演奏しているように聴こえれば大成功です。

F・ショパン（1810～1849）
ロンド ハ長調 作品73

①オリジナル　②9分　③4　④Peters　⑤ゴールドストーン&クレモウ（Olympia）

ショパン18歳のときの作品で最初はソロ用に、後に2台ピアノ用に編曲されました。この曲の評価においては、中期や後期の作品と比較して、詩的な面や精神性が感じられないとよくいわれていますが、初期のピアノとオーケストラの作品同様に、華麗なパッセージ、装飾音によってピアニスティックな演奏効果が発揮できます。

F・リスト（1811～1886）
ラコッツィ行進曲

①アレンジ　②9分　③4　④Editio Musica Budapest　⑤ブレトニョフ（ソロ版・ビクター）

ソロ用の《ハンガリー狂詩曲第15番》をオーケストラ用に編曲したものを2台ピアノ用にアレンジしてあります。前半の堂々と演奏されるテーマを歯切れよく処理することと、中間部の叙情的な旋律とのコントラストを十分に表現する必要があるでしょう。また、オクターブ奏法が多用され、華麗さをより引き立たせています。なお2台8手の版（Robert Lienau）も魅力的です。

J・ブラームス（1833～1897）
ハイドンの主題による変奏曲 作品56b

①オリジナル　②17分　③5　④Peters　⑤アルゲリッチ&ラビノヴィッチ（テルデック）

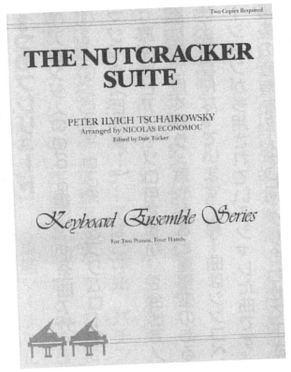
ロマン派の2台ピアノのための作品の白眉。オーケストラ用（作品56a）がよく知られていますが、2台バージョンが単なる編曲ではないとブラームスがいっているように、ピアノならではのパッセージに溢れています。特に第5変奏のリズムを軽快に演奏することと、終曲のパッサカリアに登場するブラームス独特のオクターブとアルペッジョを壮麗に表現すると最高です。

A・ボロディン（1833～1887）
ダッタン人の踊り～オペラ《イーゴリ公》第2幕より

①アレンジ（A.Pope編）　②3分　③3　④Belwin Mills　⑤ゲルギエフ指揮（原曲・フィリップス）

このあまりにも有名な曲は、最近テレビのコマーシャルや2台のピアノでも盛んに演奏されるようになりました。2台ピアノの用の曲集は7曲で構成されていて、「ダッタン人」のテーマが一番楽しめるのは第1曲です。透明な音色とシャープな響きを意識してください。歌いすぎてテンポダウンは禁物です。

P・I・チャイコフスキー（1840～1893）
舞踏組曲《くるみ割り人形》作品71a



①アレンジ（N.Economou編）　②全曲21分　③4　④Belwin Mills　⑤アルゲリッチ&エコノム（グラモフォン）

チャイコフスキーのバレエ音楽の美しさは天下一品です。この壮麗さは2台ピアノで演奏しても抜群の演奏効果を発揮します。特に第3曲の〈金平糖の踊り〉はメタリックな音色で表現しましょう。第8曲〈花のワルツ〉は最も華麗な曲で、この曲のみ弾く場合はピアニストのコチシュ版（Editio Musica Budapest）がお勧めです。

E・シャブリエ（1847～1894）
狂詩曲《スペイン》

①アレンジ（シャブリエ編）　②7分　③5　④Enoch　⑤アンセルメ指揮（原曲・デッカ）

フランス内務省の官吏を辞し、最初に発表した作品《スペイン》でシャブリエは作曲家の地位を確立しました。ダイナミックにピアノを演奏したシャブリエにふさわしく、この曲も大胆な和声と鋭いリズムによってスペインそのものを表現しています。テンポ感、リズム感、同音連打がこの曲の「命」です。

近・現代

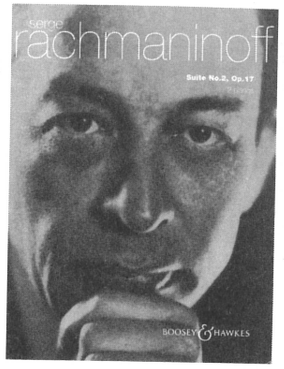
A・アレンスキー（1861～1906）
組曲 第1番 作品15

①オリジナル　②全曲15分　③3　④Schirmer

モスクワ音楽院でラフマニノフを教えたアレンスキーは、ソロの曲では《練習曲》作品25―3のみ有名で、むしろデュオ作品の作曲家として知られ、4つある組曲の中でもこの第1番がよく弾かれます。第1曲の〈ロマンス〉はⅠによってエチュード的なフレーズが奏されますが、ピアノ弾きにとってたまらない魅力です。第2曲〈ワルツ〉はそれぞれのメロディを装飾し合います。第3曲〈ポロネーズ〉はⅡのポロネーズ・リズムをセンスよく弾くことが大切です。

C・ドビュッシー（1862～1918）
白と黒で
①オリジナル　②全曲16分　③4
④Durand　⑤リヒテル&ブリテン（デッカ）

ピアノの白鍵と黒鍵をイメージし、純粋なピアニズムを表現した曲です。第1曲は下降アルペッジョによって音が噴出される華麗な曲です。第2曲は悲劇的な響きの中に聖歌と《ラ・マルセイエーズ》が聴こえ、第3曲はトッカータ風の曲になっています。ドビュッシーは「ヴェラスケスの絵の灰色に似た色彩と感動をピアノから引き出した」といっています。

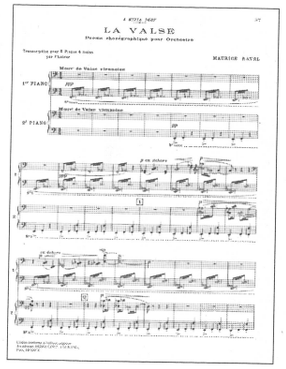


S・ラフマニノフ（1873～1943）
組曲 第2番 作品17
①オリジナル　②全曲25分　③5
④Boosey & Hawks　⑤アルゲリッチ&フレイレ（フィリップス）

近・現代の2台ピアノ作品の中の最高傑作といえるでしょう。第1曲は壮大な行進曲で大きな手と和音をしっかりと弾ききるテクニックが必要です。第2曲のⅡがⅠに美しくデコレーションする中間部は弾いていて感動します。第3曲のクライマックスも情熱的であり、第4曲のタランテラではラフマニノフのピアニズムをたっぷりと堪能できます。

G・ホルスト（1874～1934）
木星～組曲《惑星》作品32より
①アレンジ（ホルスト編）　②8分　③4
④J.Curwen & Sons　⑤ヴォースター&チェンバーレン（Naxos）

原曲のオーケストラ曲とピアノ2台版を比べると、かなり色彩感が違って聴こえます。ここではピアノの特徴を生かせる《木星》を選びました。全7曲の中でも華やかでピアニスティックな演奏効果を期待することができます。特に4番目の厳かなテーマは、ピアニスト冥利につきるすばらしい旋律です。元イギリスの皇太子妃であったダイアナ妃の葬儀のときに歌われた讃美歌と同じ曲です。ぜひ2人で弾きながら感動を味わって下さい。



M・ラヴェル（1875～1937）
ラ・ヴァルス
①アレンジ（ラヴェル編）　②12分　③5
④Durand　⑤アルゲリッチ&フレイレ（フィリップス）

オーケストラ版はハープ弾きにとってストレス解消になるほどの派手なグリッサンドがフォルティッシモで登場しますが、2台ピアノ版もオーケストラに負けない溢れんばかりの色彩感とピアニスティックな妙技でピアノ弾きを満足させてくれます。「渦巻く雲が次第に消え、旋回しながらワルツを踊る人たちにシャンデリアの光がキラキラと降り注ぐ」（ラヴェル談）ような、シャープなタッチで演奏して下さい。

G・ガーシュウィン（1898～1937）
3つのプレリュード
①アレンジ（G.Stone編）　②全曲7分
③3　④Warner Bros.　⑤プリムローズ・マジック（ビクター）

原曲はピアノ・ソロ用ですが、2台ピアノ版は音が厚くなり、華やかさと重量感のある仕上がりになっています。第1曲はシンコペーションが多用されているシャレた曲です。最後の音階を2人でピッタリ合わせて下さい。第2曲はブルースの雰囲気を、第3曲ではビギンのリズムと、最後のオクターブをキメて締めくくりましょう。

F・プーランク（1899～1963）
シテール島への船出
①オリジナル　②2分30秒　③3　④Max Eschig　⑤タニエル&ブラウン（Chandos）

シャレたセンスと冴えたピアニズムが必要とされます。一見弾きやすそうですが、和音の跳躍はしっかりとさらって下さい。アンコールにもぴったりの曲です。

A・コープランド（1900～1990）
エル・サロン・メヒコ
①アレンジ（L.Bernstein編）　②10分
③5　④Boosey & Hawks　⑤バーンスタイン指揮（原曲・グラモフォン）

原曲はオーケストラ作品で、メキシコ民謡の明快な旋律が情熱的に展開していきます。2台ピアノで演奏することによってもそのエネルギーは失われることなく、むしろ打弦楽器のシャープさがこの曲の魅力を引き立たせます。鋭敏なリズム感をもって演奏に臨んで下さい。

D・ショスタコーヴィチ（1906～1975）
組曲 作品6
①オリジナル　②全曲27分　③4
④Sikorski　⑤タニエル&ブラウン（Chandos）

ショスタコーヴィチは第1回ショパン・コンクールで名誉賞を獲得したほどの卓越したピアノのテクニックを持っていました。この曲も合理的なピアニズムにより、優れた演奏効果を発揮できる作品です。第1曲は高音域を生かしたプレリュードでピアノがよく鳴ります。第2曲は軽快さを、第3曲では思いっきりロマンティックに（しかしやりすぎないように）、そして第4曲は圧倒的にリズムを強調しましょう。

W・ルトスワフスキ（1913～1994）
パガニーニの主題による変奏曲
①オリジナル　②6分　③5　④Chester
⑤アルゲリッチ&フレイレ（フィリップス）

リストやブラームス、ラフマニノフでおなじみのテーマによる変奏曲です。テーマは、どの編曲よりもスピーディで緊張感に満ちています。続くそれぞれの変奏は和音・アルペッジョ・オクターブは当然で、トレモロや疾走する重音がめまぐるしく登場し、ありったけのテクニックを披露することになります。

これから来日するピアノ・デュオ●マルタ・アルゲリッチ&ネルソン・フレイレ：10月14日(火)～10月28日(火)の期間中、全国7ヵ所で8公演を予定。[招聘]梶本音楽事務所 Tel03-5749-9960●エンダー姉妹：10月20日(月)～11月1日(土)の期間中、全国で9公演を予定。[招聘]ムジークレーベン Tel03-5458-7777

J・コリリアーノ（1938～　）
万華鏡
①オリジナル　②6分　③4　④Schirmer

2001年、交響曲第2番でピュリッツァー賞を受賞したコリリアーノのとっておきの2台ピアノの作品です。ピアノの鍵盤を駆使して、万華鏡を覗いて見ることのできる豪華絢爛な色彩を表現します。曲はトッカータ風で無調が大部分を占めますが、中間に口長調の部分を挟み、キラキラ度200%で豪快に終わります。2人のレパートリー拡充にお勧めの1曲です。

●曲集

★先生と生徒の2台ピアノコンサート Vol.1

①オリジナル+アレンジ（S.Ravinof編）
③第1ピアノ=初級・中級　第2ピアノ=中級　④ヤマハミュージックメディア

第1ピアノが演奏する原曲には大きな変更をせず、第2ピアノがサポートするのがこの曲集の特徴です。2台によってアンサンブルの楽しさや華やかさを倍増することができるのはもちろんのこと、第2ピアノのしっかりとしたサポートにより、曲に必要な様式感、テンポ感、フレージングやペダリングを正しく指導できることが最大のメリットとなります。

第1巻にはJ・S・バッハの《アンナ・マグダレーナの音楽帳》より〈メヌエット ト長調〉〈同 ト短調〉〈ミュゼット〉、〈小プレリュードとフーガ〉より〈リュートのために〉、《2声のインヴェンション》より第8・13番、ベートーヴェンの《エリーゼのために》と《ドイツ舞曲》、シューベルトの《ドイツ舞曲》、シューマンの《楽しき農夫》というおなじみの曲が勢ぞろいしています。特に《エリーゼのために》は夢中になって弾いてしまいます。

★先生と生徒の2台ピアノコンサート Vol.2
①オリジナル+アレンジ（S.Ravinof編）
③第1ピアノ=中級　第2ピアノ=中級・上級　④ヤマハミュージックメディア

第1巻同様、第1ピアノが演奏する原曲には大きな変更をせず、第2ピアノがサポートします。原曲とアレンジ部分も第1巻より少しグレードアップしています。第2巻にはW・A・モーツァルトの《ソナタ ハ長調》K545第1楽章、《トルコ行進曲》、シューマンの《楽しき農夫》に変奏をつけた曲、ドビュッシーの《月の光》が集められています。モーツァルトのソナタはグリーグ編のものが有名ですが、このアレンジでは第2ピアノによる前奏があり、曲全体においてソフトなムードでサポートするようになっています。また、シューマンの《楽しき農夫》は第1巻にも掲載されていますが、まったく違うアレンジになっていて第1ピアノも華麗に展開し、発表会にふさわしい曲に変身しています。

なお、本稿で触れたピアノ音楽の作曲家については拙著『ピアノを読む』（音楽之友社）を参考にして頂けたら幸甚です。

（以上岳本恭治）

●邦人作品

尾高尚忠（1911～1951）
みだれ～2台のピアノのためのカプリッチョ
①オリジナル　②12分30秒　③5　④音楽之友社　⑤丸山淑子&裕美子（ライヴノーツ）

この曲は、作曲者がウィーン留学中の1938年にウィーン・アカデミーのピアノ科教授ヨーゼフ・ディヒラーの依頼によって、結婚式の贈り物として作曲された。日本の祭の強烈なエネルギーの沸騰が強烈なインパクトを聴く人に与えるが、身体ごとピアノにぶつかっても音楽できるテクニックと体力が必要。しかし「格好良さ」で根強い人気がある。

中田喜直（1923～2001）
軍艦マーチによるパラフレーズ
①オリジナル　②7分　③5　④全音楽譜

1973年初演。テーマはご存知、パチンコ店で流れている《軍艦マーチ》で、これに軍歌やショパンの《葬送行進曲》などがからまっている（版元品切）。《軍艦マーチ》に拒否反応を起こす人には、もう1曲《無宗教者の讃美歌》（全音楽譜）がいいかもしれない。1963年の作品で、2台ピアノの響きの美しさやかけあいの面白さを表現している。

奥村 一（1925～1991）
屋台ばやし
①オリジナル　②6分　③5　④全音楽譜

秩父夜祭りの祭囃子を素材にした作品で、演奏会で取り上げられることも多いのだが、現在は版元で品切らしい。作曲者はピアノ作品が多く、《ソナチネ》《カプリッチョ》などが有名だ。この作品は力強く激しく躍動するリズムや、火花を散らすような「音の饗宴」が、2人のピアニストの打楽器的な演奏によってエネルギッシュに高められていく。

三善 晃（1933～　）
組曲《唱歌の四季》
①オリジナル　③4　④音楽之友社　⑤三善晃&田中瑶子（フォンテック）

2台ピアノと児童合唱のために作られた組曲を田中瑶子氏の求めによって2台ピアノ用に改作したもの。〈朧月夜〉〈茶摘み〉〈紅葉〉〈雪〉〈夕焼け小焼け〉の5曲からなる。三善作品はどんなに小さな作品でも、常に繊細で鋭敏な感性が求められるだけに、音、響き、音質、ペダルなどに無神経な演奏は禁物で、演奏者の心が楽譜とどう対話できるかが勝負。

吉松 隆（1953～　）
ランダムバード変奏曲
①オリジナル　②12分　③3～4　④音楽之友社　⑤吉田慶子&麻生真紀（カメラータ）

《朱鷺に寄せる哀歌》を始めとする、作曲者がこだわる一連の「鳥」に関する作品のひとつ。1985年の作品で、主題と8つの変奏からなる。吉松作品の特徴である、いわゆる「現代音楽」とは一線を画した、簡明な要素による、冥想的雰囲気をたたえた繊細な感性がここでも聴き取れる。それが多くの演奏者の心をとらえて放さないのだろうか。

（以上河原 亨）

ピアノ・デュオ関連のおすすめウェブサイト●田中一実・由美子夫妻が主宰している「楽しい連弾の部屋」は、連弾だけでなくデュオの楽譜やCDの紹介だけでなくコンサート情報も充実していて、インターネットを利用できる方なら一度はのぞいてみたいサイトだ。URLは、http://home.att.ne.jp/gold/rendan/